よみがえる文化財

□■30

撮影、保存プロも恩恵

美術品修復の現場から

吉備国際大助教授
小西　伸彦氏

◆「作品」学ぶ台帳製作

大学のゼミでは倉敷民藝館と共同で作品台帳を作っています。高吉学芸員と一緒に作品を採寸して撮影し、データを入力していきます。美術品に対する心構え、取り扱いの所作が要求され、美術品に触れながらの実習ですので、学生にはよでも勉強になります。

作品台帳には作品の名前、経歴、サイズの他、展示歴、貸出歴、掲載歴、修復歴などを記録します。立体物の場合は、複数方向から見た写真を付ける場合があります。デジタルアーカイブができていれば、作品の収蔵場所や展示場所、作品が掲載された書籍の保管場所もすぐに見つけることができ、展示されず収蔵庫に保管されている作品でもパソコン画面で紹介することができます。

◆劣化せず永久保存

博物館では写真の貸し出しも頻繁に行われます。収蔵品が本に掲載される場合、出版社から作品写真の貸し出し依頼があります。通常、美術品は大型カメラで撮影します。しかし、フィルムは、保存状態にもよりますが、経年変化で変色したり画像が不鮮明になっていきます。複製ポジフィルム（デュープ）をつくる場合がありますが、オリジナルほどの精度はありません。

ところが、デジタル化されたデータは劣化しません。保存場所さえしっかりしてやれば永久に新鮮な状態で保管できます。複製も簡単で、オリジナルと全く同じ画質です。画像データの貸し借りはCD－ROMなどで手軽に行えますし、軽いデータならメールに添付してでも送れます。

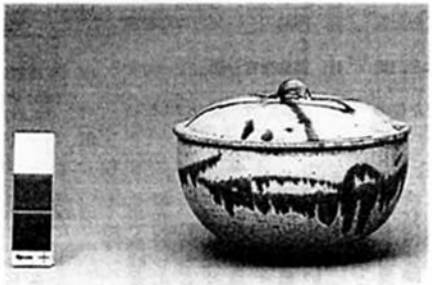
撮影現場でもデジタルはたいへん有利です。建物は下から撮ると台形に写ります。これを矯正するには「あおり」という撮影技術を使います。「あおり」は大型カメラの独壇場です。しかし、デジカメとパソコンでこの矯正が可能になりました。歪状のものは正しく歪に、建物もゆがみなく写真にすることができます。美術品や建築物撮影に必要だった高度なテクニックが、デジタルの恩恵で身近になったのです。東京のカメラ店にはプロが手放した大型カメラの中古が増えたそうです。

◆経費削減と「安心」

デジタル写真はフィルムを使わないので、フィルム代も現像代もいりません。しかも写したその場で画像が確認でき、経費削減と安心を一度に実現させました。失敗が許されないプロカメラマンにとってデジタルの恩恵は実に偉大です。大学と博物館が協働できれば相互にメリットがあります。

ゼミでは、備中松山城ゆかりの文化財と高梁ゆかりの芸術家の作品を収集・研究・展示する高梁市歴史美術館とも共同で作業をしています。加古学芸員に協力して、大型カメラとデジタルカメラ両方で作品を記録しているのです。この3月に卒業した学生はこのアーカイブを卒業論文のテーマにしました。また歴史美術館は、高梁市の写真館が残したガラス乾板や珍しいフィルムを多数所蔵しています。今後は学生とともにこの古写真のアーカイブも進めていく予定です。

「赤羅威肩（レプリカ）」＝高梁市歴史美術館蔵



【「盌（わん）物」（福島県本郷、現代）＝倉敷民藝館蔵】作品の左にあるのはQPカードというトーン識別カード。白、黒、18%反射率のグレー3色で構成され、デジタルカメラで撮影する時に作品と共に写し込む。カメラの露出計は18%グレーを基準に精度設定されており、白いモノも黒いモノもグレーに写す。画像処理や印刷工程で、白は白に、黒は黒に仕上げるためにこのカードを活用する

【石彫】（静岡県三島市、現代）＝倉敷民藝館蔵

きび談語

私も5月で30歳になりました。会社に入社したのはもう6年も前になります。これまで何を成してきたのか、と考えると虚無感に襲われます▲30歳を目前にして、記者を辞めて教諭に転職した他社の同期がいました。行きつけだったバーのマスターは30歳を過ぎてシェフを目指すと店を閉めました。一方、既に子どもがいる公務員の同級生もいますし、古着屋を経営していた友人は30歳を前に会社員となりました▲目の前の仕事をこなすのに懸命な6年間でした。目標へ向けた努力を重ねなくてはいけないのに、目標さえ定まらず歳だけが重なった日々でもありました。30歳という節目の年。何のために記事を書くのか。改めて、自分に問い直したいと思っています。【若狭幸治】